

『CLINIC NOTE 2024 年 5 月号 (226号)』

訂正とお詫び

掲載記事中、以下の記事に誤りがございました。参考文献 16 の執筆者のご要望により、訂正させていただきます。読者の皆様及び関係者の方々に深くお詫び申し上げます。

株式会社 EDUWARD Press

2024 年 5 月 21 日作成

頁	記事タイトル	該当箇所	誤	正
37	特集 新ガイドラインと 専門家の臨床的解 釈から学ぶ もっ と知りたい！ FIP の検査と治療 ③治療：症例紹介 (応用編)	投薬プロト コル・投薬 量	<p>モルヌピラビルについてはいまだに正式な薬剤によるデータは少ないが、2023 年 ACVIM での報告と佐瀬先生の報告¹⁶が出ている(表 3)。両者では薬用量に違いがあり、ACVIM での報告では投与量が 15 mg/kg BID を超えると骨髄抑制が生じるため禁忌としている。一方、筆者は以前から佐瀬先生の報告による投与量と同等量で使用しているが、問題になるような骨髄抑制は認めていない。</p>	<p>モルヌピラビルについてはいまだに正式な薬剤によるデータは少ないが、2023 年 ACVIM での報告(表 3)が出ている。</p> <p>また佐瀬先生の報告¹⁶では、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・滲出型の猫：10 mg/kg BID ・非滲出型の猫、化膿性肉芽腫性病変のある猫：15 mg/kg BID ・眼や神経徴候のある猫：20 mg/kg BID <p>とされている。両者では薬用量に違いがあり、ACVIM での報告では投与量が 15 mg/kg BID を超えると骨髄抑制が生じるため禁忌としている。一方、筆者は以前から必要に応じて 20 mg/kg BID でも使用しているが、問題になるような骨髄抑制は認めていない。</p>
37	特集 新ガイドラインと 専門家の臨床的解 釈から学ぶ もっ と知りたい！ FIP の検査と治療 ③治療：症例紹介 (応用編)	表 3 モル ヌピラビル の薬用量	次ページをご確認ください	

(誤)

表3 モルヌピラビルの薬用量

臨床所見	2023 ACVIM フォーラム	Dr.Sase ¹⁶
滲出液が認められる 眼病変・神経症状なし	10 mg/kg、q12h	10 mg/kg、q12h
滲出液は認められない 眼病変・神経症状なし	12 mg/kg、q12h	15 mg/kg、q12h
眼病変あり	12～15 mg/kg、q12h	20 mg/kg、q12h
神経症状あり	15 mg/kg、q12h*	20 mg/kg、q12h

* 骨髄抑制のリスクがあるため 15 mg/kg、BID を越えない

(正)

表3 モルヌピラビルの薬用量 (2023 ACVIM フォーラム)

臨床所見	2023 ACVIM フォーラム
滲出液が認められる 眼病変・神経症状なし	10 mg/kg、q12h
滲出液は認められない 眼病変・神経症状なし	12 mg/kg、q12h
眼病変あり	12～15 mg/kg、q12h
神経症状あり	15 mg/kg、q12h*

* 骨髄抑制のリスクがあるため 15 mg/kg、BID を越えない